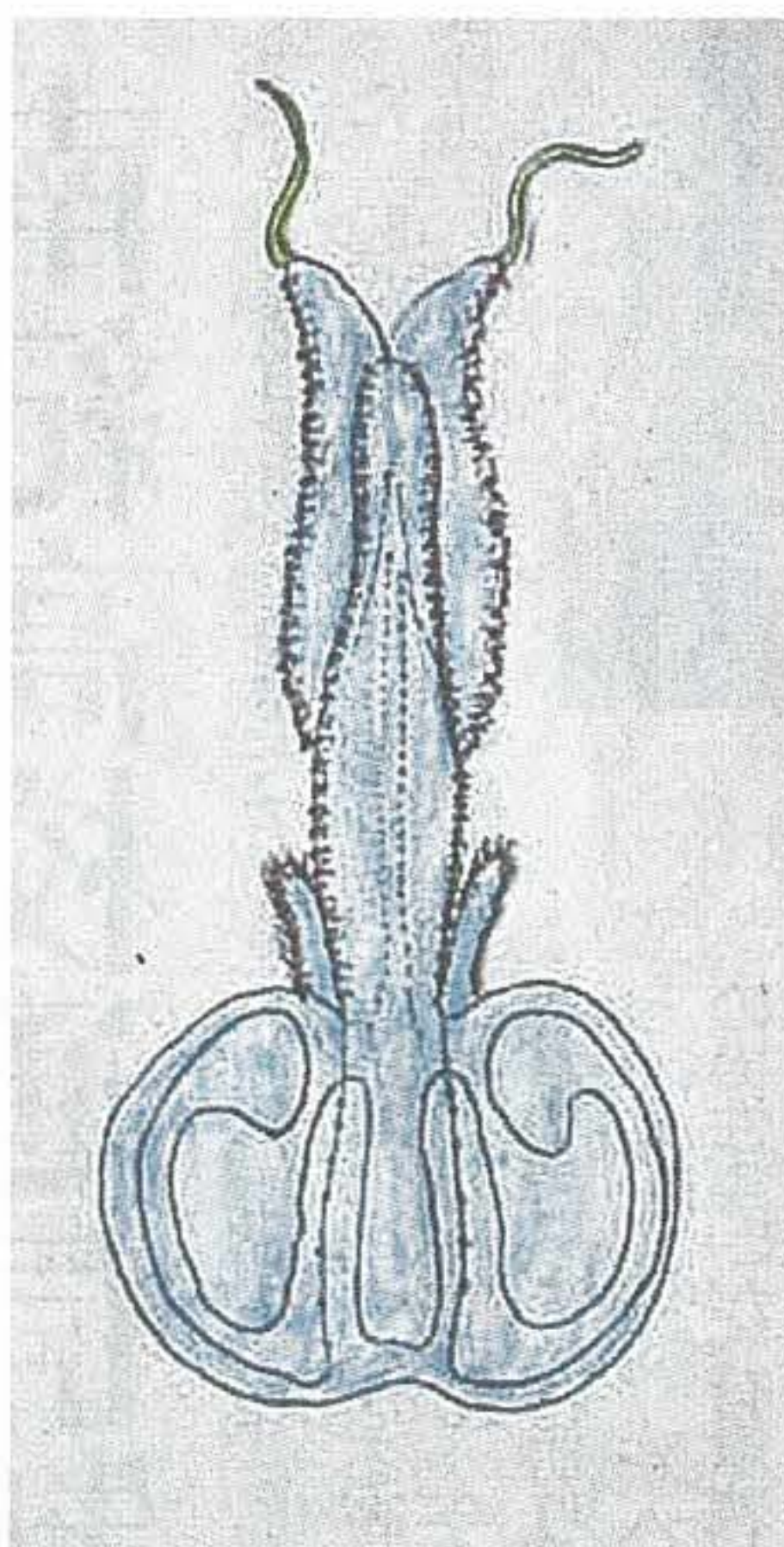


紀伊民報

アカダマクラゲ



三角錐状突起とムチ状構造物を傘頂部に持つアカダマクラゲ

(Komai, 1942改写)

イカやタコは敵に襲われると墨を吐く。イカは分身として、タコは敵をけむに巻くためだ。アカダマクラゲは、これに似た芸当をする不思議なクラゲである。田辺湾では2個体だけ記録がある。京都大学瀬戸臨海実験所付近で1920年ごろと40年に1個体ずつ発見された。

アカダマクラゲの傘頂部には、他の種類に見られない三角錐(さんかくすい)状のゼリー質の突起が二つあり、それぞれの突起からはムチ状のものが長く伸びている。そのムチに特別な構造はなく、クシクラゲ特有の餌取り装置「膠胞(こうほう)」もなかった。この器官の機能はいまだに不明である。

アカダマクラゲは瀬戸臨海実験所初代所長の駒井卓先生が42年に再記載されている。私は沖縄方面でのみ本種を採取しただけで、紀南地方では一度も遭遇したことがない。沖縄で採取した個体は体長8センチほどと同種としては大型である。容器に入れて指でつつくと、黄褐色のヨードチンキのようなインクを噴射。たちまち容器の中を着色した。インクの出所を調べるため、顕微鏡でつぶさに観察した。すると、隣り合う櫛(くし)板の間に1個ずつ並ぶたくさんの赤い斑点がインクつぼであることが分かった。インクはここから何度も噴出された。液をなめると苦かった。春の使者アメフラシも強く刺激すると、むらむらと紫の煙幕を吐く。学生ごろ、実習でウニの発生を観察していた時、試しにアメフラシの液を数滴垂らしてみた。するとウニの発生が止まった。このような効果もアカダマクラゲのインクにあるのかもしれない。

アカダマクラゲの詳細は、75年に江の島(神奈川県)産で欧文報告されている。白浜でも二度あることは三度あってほしいと願っている。

(京都大学准教授)

久保田 信

60

